

第五章 逆さの鏡

夜の寒さは厳しいものだった。幾度か親切な遊牧の民に世話になつて、ここ半月ばかりは雨風をしのぐこともできた。しかし昨晩は遊牧の民にも出会えなかつた。

チュンオウの石と紙で火をおこし、リビの不思議な香りの茶を飲んで、冷えた身体を温めた。朝食の後にすぐ歩きだし、昼過ぎにヒエミチリアスの街に着いた。

街とは言うものの、アルタスが住んでいたような布の家が集合しているだけで、デニアのような大きな市場は見つからない。

時折牛の引く車が通る。荷台には山ほどの毛織物。家畜は牛より羊が多い。それ以外で見かけるのは兵士の姿ばかり。

「こういうのも、街って言うのか？」

「……城下町にしては、確かに大きくはないな」

チュンオウは、リヨウキの上から見渡した後で言つた。

トウラスは自分の視界の範囲で観察をしてみた。すると、アルタスの家とこの街の家の違いが見えてきた。

アルタスの家は遊牧民で移動を強いられるので、いつでもばらばらにしてしまえるような造りであった。しかしこちらは、外見え似ているものの、根を下ろしているのが良くわかる。柱は地中深く打ちつけられており、頑丈そうな木の扉までついている。扉が開いている家の中を覗くと、木でできた床が見えた。

「ホピネスの遊牧住居をそのまま根付かせたような街だな」

リビの形容はその通りで、トウラスは素直に同意した。

「なあ、あれは何だ？」

トウラスが先ほどから気になつてているのは、土の山だった。土が山のように盛り上げられ、そこに木が生えている一角がある。

「どうして土を山のように盛り上げてるんだ？」

「それは逆だ。あれは山を切り崩した痕だ」
チュンオウが、悲痛さをおぼろげに映した顔で言つた。

「あれが山……？」

よく見ればそれは山だった。土を盛り上げた後に木が育つたのではない。木々と共に、山が切り崩されたのだ。

「……なんで切り崩すなんてこと！」

きつく投げかけてしまつた自分の問いに、リビが諭す。

「生活のためだ。ああしなければ、居住のた

めの木材なども手に入らない。それにこの辺りの大地は砂礫が多く農耕に向いていないから、あの土を農耕に使おうとしたのかもしれない。もしくは、金属や宝石を掘るのが目当てだったのかもしれないな」

そう言わると、うまく反論はできなくな

った。山や木がかわいそうだとか言つたところで、単なる綺麗事にしかならないだろう。やめろと言うなら、生活を潤す他の方法を挙げなければ意味がない。それも思いつかないでので、リビの言葉を受け止めるだけしかできなかつた。

やり場のない思いでその山を見上げていると、背後から声をかけられた。

「あんたたち、兵士志願の人たちかい？」織物の街であることを想わせる民族衣装

の女がいた。

「宿ならうちに来てくれば安くしとくよ。どうだい？」

「一つお聞きしたいのだが……」

チュンオウがリヨウキの上から問うた。

「ここでは王より王子の方が人気と聞くが、戦の主導権はどちらが握つておるのかな？」

「そりやあ、王様だよ」

腰に手を当てて、女は嘆息した。

「王子は気も優しくて強いから老若男女問

わす人気はあるけれど、やっぱり王様だよ。」

でも今度の戦は王子が軍を統率すると聞いているから、志願兵が多くてね。特に遊牧民に人気があるから、あつちの方から来る武人が多いよ。それでも足りないから、他の国からも兵を募つてゐるだけね」

「戦は王と王子の考えなのですかな？」

「そうじゃないかい？ まさか王子が戦に

出るとは思わなかつたけれどね」

女は肩をすくめた。リビが一步前に出る。

「あなたは戦の理由を御存じですか？」

「私らにもつと肥沃な土地と食糧を与えて下さるためさ。頼もしいじやないか！ 私は

期待しているよ。ついこの間、隣のエリノワを支配したとたんに食糧の配給があつたらね。それで私らは食いものがてきて助かったのさ」

チュンオウが難しい顔をしていた。リビも何か思うところがあるらしい。支配がどういうもののかよくわからないトウラスであつたが、あまりいい気分ではないのは確かだつた。

「宿を貸していただこうか」

チュンオウが言うと、女は顔を明るくした。女の後をついてゆくと、あの白い家に連れ

て行かれた。だがずいぶんと小さいので、客用の別棟なのだろう。彼女が住んでいるのは、多分隣の大きな古い家の方だ。チュンオウが小さい家の方にリョウキを繋いだ。

「金でも物々交換でも、交渉には乗るよ」

女がそう言つてくれたので、チュンオウはいつものようにいくつかの玉を見せた。しかし女は腕を組んで唸つた。

「そつちの袋はなんだい？」

女が指差したのは、トゥラスが肩にかけていた麻袋だった。

「そちらは食糧ですが」

「私はそつちの方がいいね。中身を見せておくれよ」

チュンオウが視線で促したので、トゥラスは中を見せてやつた。中身はデニアでもらつた食糧の一部だ。割るのにはなかなか硬そ

な木の実や、豆、硬いパンのようなものもある。

「いいものばかりじゃないか！　こつちをくれるなら、二晩は貸してやつてもいいよ」

「それはありがたい。ではその袋をお渡ししよう」

チュンオウがそう言うので、トゥラスはそれを女に渡してやつた。

「ありがたいねえ。最近この辺りでもあまり

食糧が流れてこなくなつたからさ。助かるよ」

女は麻袋を嬉しそうに抱えて、早々にその場を去つた。

小さな家に入ると、狭い所にベッドが四つと小さなテーブルが一つ置かれていた。扉を閉めると、真っ暗になる。この家は天井に穴は開いておらず、しつかりと雨風をしのげるようになつていた。明かりとりの窓もあるが、

チュンオウとリビはトウラスの性質を知つて、いるので開けようとはしなかった。

代わりにリビが小さなランプに火をつけた。我慢できるほどの小さな光の中で、トウラスは日光避けのフードを外した。

「やはり戦の拡大は確実ですね。時間の問題です」

リビがランプをチュンオウのそばへ置いた。ベッドに腰掛けたチュンオウが、重々しく頷いた。

「遊牧の民は王子を慕つて、いるようだが、王子も戦に行くとは、好ましくないな」

「ええ。遊牧の民が王子を餌に狩りだされると、やはりそれだけ軍は大きくなります。それは戦の拡大も意味するところでしょう」

「そう言うと、リビは立てかけた生首の杖に視線をやつた。

「夜鷹が気になります。昨日の夕方の夜鷹、こちらの方に飛んでいきました。もしかすると、夜鷹の主はヒエミチリアスの王を指しているのかもしれません。世の均衡を崩す夜鷹の主がヒエミチリアスの王というのは、つじつまが合ってきます」

チュンオウは唸つて、腕を組んだ。リビは続けた。

「夜鷹の主を探す必要があります。もしヒエミチリアスの王が夜鷹の主であれば、王が世の均衡を崩していることになります。それなら王をどうにかすれば、戦火も治まります。……ただ、どのように確かめるかが問題ですね」

「そこまで言つてリビも考え込むので、トウラスは嘆息交じりに言つてやつた。

やねえか

それにリビがため息と共に言つた。

「だから、それをどうするかが問題なんだ。

兵士志願だと言つても、異国からの者では王

に謁見などできまい」

「関所でやつたような、商人になりますます作戦は使えないのか？」

「お前な、本当にヒョウビを売る気か？」

「それは嫌だね」

即答したトゥラスに、「だからこうして考

えているんだ」と、リビが冷ややかな目を向けてきた。トゥラスは言い返せなくなつて黙つたが、ふと良い案が思いついた。

「俺が確かめてきてやるよ。その夜鷹の主つてやつを」

リビとチュンオウが怪訝な顔でこちらを

見た。

「どうする気なのだ、トゥラスよ」

心配そうにチュンオウが言うので、トゥラ

スは不敵に笑つてやつた。

「爺さん、俺に会つた時のこと覚えてないのか？」

真っ暗な夜の森でチュンオウを助けたのは、トゥラスとトゥラスの兄弟だ。

「夜は俺たちの時間だぜ？ 見くびつてもらつちや困るね」

ヒョウビも頼もしく喉を鳴らした。

「誰もが寝静まつた真夜中に、夜鷹の後を追けてきた。トゥラスは言い返せなくなつて黙つたが、ふと良い案が思いついた。

追つてみよう

「お前、城に潜入する気なのか！」

突飛なトゥラスの意見に、リビが語気を強

めた。

「そのくらい楽勝だ。あの城、いくつも窓があつた。城は石を積み上げた造りだし、あれなら壁も登れる」

「それは危険だ。衛兵もいくらかおろう」

チュンオウが険しい顔で言つてくるが、トルラスも考えるところがあつての発案だつた。

第五章 逆さの鏡

「……俺だつて、戦を止める手伝いがしたいんだ。この世界を、アルタスが戦に行かなきやならない世界にしたくないんだよ。戦のない世界にするつて、アルタスと約束したんだ」

まつすぐチュンオウを見て言つた。チュンオウはしばし考えた様子を見せ、それからようやく深く頷いた。

「トゥラスよ、そうだ、お前は強い。この中では一番身軽であろうし、虎の知恵を授かっているお前であればうまくやろう。……任せ

たぞ」

「ああ。任せろ」

トルラスは笑みをたたえて頷いた。

そこに、小さくりビの吐息が落とされた。

「仕方ない。ならば私も手伝おう。どの夜鷹が水たちの言う夜鷹なのか、それを確かめねばならない。それは私が引き受ける。私が示した夜鷹を追え。それから城のそばでも控えていよう。もしもの時に何かできるかもしないからな」

「私もリョウキと共に城の傍で待つていよう。リョウキは駿馬しゅんめだ。急ぎ撤退が必要になれば、リョウキの力が必要だ」

トゥラスら三人は頷き合つて、ひとまず作戦会議は解散となつた。トルラスは夜に備え、ベッドに横になつた。そこへヒョウビもやつ

てきたので、ヒヨウビの毛並みを撫でていると、久々の寝心地の良いベッドはすぐにトウラスを夢の中へ誘った。そして意識はずつと深いどこかへ引きずり込まれていった。

暗闇が広がっている。そこは光も何も見えない、上も下も無いところ。だが、何かざわざわする。形のない闇が動こうとしている。だが、まだ動かない。

足を踏み出してみると、地面などないはずなのに足は受け止められた。一步、また一步。歩いて、そして駆けだした。だがすぐに立ち止つた。ずっと先も闇、走ることに意味がないように思えた。

「待て！」
手を伸ばしてそう叫んだところで、目が覚めた。

不思議な夢だつた。

すると、不意に遠くから、喉の息を短く切るような鳥の声が聞こえた。そうかと思えば、顔のすぐ横を夜鷹がすり抜けた。

夜鷹は闇の中の何かにとまるとき、翼を閉じ

たまま顔をこちらに向けて、黄色い眼でこちらをじっと見た。

夜鷹ははつきり見えるのに、夜鷹がとまっているものは見えなかつた。夜目が利くはずのこの目を細めて見ても、何も見えない。近づいて見てみようと思い走つたが、トウラスが近づいていくと夜鷹は闇に飲み込まれて消えてしまった。

こういう夢は起きるとすぐに忘れて、おぼろげにしか記憶に残らないはずだ。しかしこれはたつた今体験したもののように身体に感覚が残つていて。闇のざわめき、夜鷹の翼が作つた風。頬に残つた羽ばたきの残骸が現

実を混乱させる。

「トゥラス！ 夜鷹だ！」

外に出ていたリビが、扉を大きく開けて駆けこんだ。

それを聞くや否や、トゥラスはベッドから跳ね起きた。日避けの布を慣れた手つきで巻き、立てかけていた剣を持った。チュンオウもすぐに外に出た。

空を見上げると、すっかり夜空になつていた。月と星が輝いている。トゥラスはフードを邪魔だと降ろした。

夜鷹が空でくるくると回っている。先程見た夢を思い出した。闇の中に消えていった夜鷹は、あの夜鷹に違ひない。

リビは杖を握り、目を閉じて集中していた。

「あそこか……」

生首の中の水が、揺らしてもいよいよ波打つていて。次にリビが目を開けると、視線を

空の夜鷹へ向けた。

「あれだ、間違いない。追うぞ！」

トゥラスは走りながら、夜空の夜鷹を目で追つた。夢では見失つたが、今度は逃がしてなるものかと。トゥラスのすぐ横で、ヒヨウビも背をうねらせて走つていた。

夜鷹の入つたところは、やはり城だった。城は石を積み上げられて作られた高い建

物だ。近くに塔が幾つもあるが、王たちがいるのは一番奥の大きな建物に違ひない。幾つも窓があり、ちらほらと灯りがついている。あのどこかに夜鷹の主がいるはずだった。

案の定、夜鷹は左から三番目、上から二つ目の明るい窓に入つて行つた。

ていた。幸いこの時間はもう街の者は寝静まつてているようだ。しかし時折光が漏れている家もあるので、やはり気をつける必要はある。

つてているようだ。しかし時折光が漏れている

うやら城壁は登るしかなさそうだ。
城は、低い城壁が張り巡らされていた。ど

背後から、静かに蹄^{ひづめ}の音が聞こえた。リ

ヨウキだ。チュンオウと、リビも乗っている。
「やはり城だつたようだな」

リビはリヨウキから降りて、トゥラスのそ
ばで声をひそめた。

「行けるか？」

「ああ。あそこなら簡単だ。近くに木がある。
あれを登ればすぐだ」

「暴れるなよ。面倒なことになる」

だが後ろから、チュンオウが言う。

「もしもの時はかまわぬ。命を優先にするこ
とを忘れるな。危うくなつたら逃げ、また出
直せばいいだけのこと」

第五章 逆さの鏡

ヒヨウビは月光で光る目で、じつとトゥラ
スを見ている。それを納得とらえて、トゥ
ラスは「行つてくる」と残し、守衛のいな
い城壁に静かに走った。

剣を腰から外し、剣を腰に止めていた紐の
片方を鞘にくくり直した。紐のもう片方の端
は手で握り、剣を柄を上にして城壁に立てか
けた。それを足がかりにして飛び、トゥラス
は軽やかに城壁の上に着地してみせた。握つ
ていた紐を手繰り寄せ、剣を引き上げる。

夜に紛れて、城壁から城を一望する。空は
星空のはずだが、黒い森のせいで闇にそそり

「わかった」

「ヒヨウビは無理だな。俺だけで行こう。ヒ
ヨウビ、爺さんたちと待つてくれ」

ヒヨウビは月光で光る目で、じつとトゥラ
スを見ている。それを納得とらえて、トゥ
ラスは「行つてくる」と残し、守衛のいな
い城壁に静かに走った。

立つ悪魔の城のようにも思えた。

「さあ、もうここは俺の縄張りだ」

夜風が白い髪を幾重も撫でる。久々に夜を

共としての行動だ。虎の血が騒ぐ。森にいた

頃は、こうして暗闇に息を殺して獲物を狙つていた。だから暗闇の中に気配を消して動くのは十八番だ。ようやく自分の得意分野が回ってきて、トゥラスの胸は高鳴った。

月光だけでもトゥラスの目には充分だった。この城壁を降りて、いくつかある塔の影を経由して一番奥の塔まで行く作戦だ。そこで様子をうかがつて、安全ならば城に潜り込もうとトゥラスは考えていた。

トゥラスは音も無く城壁から飛び降り、見張りの目をかいくぐつて一つ目の塔にたどり着いた。高い円柱の塔だ。塔の奥に誰もないのは気配で分かつたので、一気に裏に回った。それから同じようにして次の塔へ。同じ手順を幾度か踏んで、城に一番近い塔まで行つた。

「ちよろいな」

次に城の横にある木に向かつた。枝は高い所にしかなく、木の幹も滑りそうだった。だがトゥラスは剣を片手に大きく跳躍し、空いているもう片方の手で枝をつかんだ。後は腕の力と腹筋で片足を枝にひっかけ、くるりと上半身を起こして枝の上に乗るだけだ。こんなことは、森では日常茶飯事だった。こうしなければ採れない木の実もあった。

一つ枝に登れば、あとは茂っている太い枝にどんどん登つて行き、夜鷹の入った部屋まで高さまで登ればよかつた。

しかし枝から夜鷹の入った部屋までは距離がある。まずは一番手前の窓に飛び移るし

かない。

トウラスは一番手前の窓に飛び移った。窓枠の端ぎりぎりに着地し、そこから警戒しながらそっと窓を覗きこんでみた。すると、突然目の前に空を切つて何かが飛び出してきた。

「うわっ！」

慌てて体制を立て直す。今のは多分槍だ。トウラスは舌打ちした。

「誰だ！」

これはまずい。さつさと黙らせなければ大騒ぎになる。

トウラスは鞘のついたままの剣を窓の中に放り投げて、見えない相手の隙を作った直後、その間に窓に飛び込んだ。着地の後、すぐに体制を立て直して、目の前の兵士を蹴り飛ばした。

しかしさすでに五人ばかりの兵に囲まれていた。どうやらここは見張り番の待機場所だつたらしい。厄介なところに入ってしまった。それでもトウラスは慌てずに、闇は己の地の利とでもいうように、少ない明りで兵士が慌てるところを、音も無く拳と脚で黙らせた。

全員が多少の呻き声と共に沈黙したところで、トウラスは放り投げたままだった剣を拾い上げ、注意深くその部屋を出た。

暗闇の廊下に、一筋光がさしているところがある。あそこが、夜鷹の入った部屋だ。入り口に一人見張りの兵がいる。

「おい、どうした？」

先ほどの物音を聞きつけてだろう。廊下の壁のくぼみに入れてあったランプをとつて、見張りの兵がこちらにやつてきた。獣のよう間に闇に身をひそめるトウラスは、その灯

りに照らされる前に風のように走った。

兵のところまでいくと、ランプの光の中に入ったトゥラスは、獣の眼で兵を捉えた。

「あ……わあっ！」

兵は震える声を上げたが、刹那トゥラスは彼の鳩尾に肘を入れた。短く呻いて男は崩れる。もう起きてきそうもなく、完全に気絶していた。足で小突いても、起きる気配はなかった。

「やつぱり普通の人間はこうなるよな」

デニアの市場の男を思い出す。すぐに復活したあの男が、やはりただものではなかつただけだつた。

「何かあつたのか？」

部屋の入口に垂れ下がつた絨毯のようないい幕の奥から、男の声が聞こえてきた。夜鷹の主だ。

こうなつたら、正々堂々正面から確認してやろうとトゥラスは思つた。夜鷹の主が闇を広げるなら、やつには聞きたいことや止めさせたいことは山ほどある。

トゥラスは剣を抜き払つて、絨毯の幕の隙間から中に滑り込んだ。そのままくるりと身体を反転させ気配の先に刃を向ける。刃の先には、肩に夜鷹を乗せた青年がランプを持つて立つていた。

トゥラスに剣を向けられた青年は、半歩退いた。しかしたつたそれだけで、青年は逃げるでもなく声を上げるでもなく、そのまま固まつたように動かなくなつた。

夜鷹を肩に乗せた青年は、驚いた顔でこちらを凝視していた。その顔は、トゥラスの顔だつた。トゥラスは自分に剣の切つ先を向けていたのだ。

どうしてそこに自分がいるのだろうか。混亂で時が止まつた。

息さえも止まつた気がした。しかし鼓動だけは速まる。目の前の夜鷹の主は、顔を洗う時に水面に映る、慣れ親しんだ自分の顔だった。ただ一つ違うところは、黒い髪で黒い瞳であること。それを除けば瓜二つの全く同じ顔だ。まるで色を逆さまに映す鏡を見ているようだつた。

第五章 逆さの鏡

黒いトゥラスが先に聞いた。トゥラスはまだ動けないでいたが、呼吸を整え、ようやく言葉を放つた。

「お前は……誰だ！」

「私はヒエミチリアス王子、フェリスホピネ

「ホピネサリアだ！」

黒いトゥラスは困惑を交えた眼差しで、それでも強く言い放つた。やつとのことで睨み返しながら、トゥラスも言い返した。

「俺は……俺は、トゥラスホピネサリアだ」

目の前の、黒い自分の目が大きく見開いた。一体これはどういうことなのだろうかと、トゥラスの頭は混乱していた。世界を旅して色々な人間がいることはわかつたが、兄弟以外で同じ人間がいるなどとは聞いたことがない。似ているという問題ではない。全く同じなのだ。目の色と、髪の色を除いては。そして似たような名前。同じホピネサリアという名を持っている。

「何故お前がホピネサリアの名を……。王族にしか継承されない名だぞ……！」

黒のトゥラス——フェリスと名乗つた彼

は、呟くように言った。

「……お前、親は誰だ？」

フェリスが声を震わせた。トゥラスはしばし迷つたが、答えることにした。

「産みの親は知らない。俺は森で育つた。虎と、幼いころは養母のばあさんに育てられた」「養母の名は？」

「……アンサリース」

その答えに、フェリスは複雑な顔で目を細め、声を絞つた。

「私の……母の名だ」

今まで積み上げてきたあらゆるもののが壊れる音が聞こえた。

トゥラスは、自分でもわからないいつの間にかに、彼に向けていた剣を下ろしていた。

しゃらくお互い無言だった。トゥラスは何を話していいかも、何を聞いていいかもわからなかつた。夜鷹の主には言いたいことはあつたはずなのに、目の前の彼には、どうしたらしいのか混乱するばかりだった。

結局、先に言葉を発したのは、視線を落としたフェリスだった。

「母上は……高齢の出産の後に死んだと聞いた。名はアンサリース。父の第一妃だった

養母の名と彼の母の名が同じとは、一体どういうことを意味するのか。自分と全く同じ顔のフェリスと名乗る青年とは、何か大きな

繋がりがあるのは確かだ。

「少し、話をしよう……」

フェリスの方から言つた。トゥラスは頷くこともなく、剣を鞘におさめた。フェリスが椅子を促してきたが警戒して、フェリスがすぐそばのベッドに腰掛けてからトゥラスはようやく座つた。

トゥラスは彼の話に耳を傾けた。彼が語る

のは、多分今まで隠されていたトゥラス自身の秘密だ。

「……私は、生まれた時に光の子と占われた

エミチリアスの王子であるフェリスが、同じ母親の胎内で共に生をうけたのだと言う。そ
れならば……。

「ばあさんは、俺の産みの母親だつたのか：
…」

「そうだ。風の噂で、私のそれと同じように闇の子と占われた赤子がいたと聞いたことが
ある。その噂によると、闇の子はヒエミチリ
アスの未来のために殺されたらしい。そして
その子供が、生まれた時に悪魔の力で母を殺
したのだと……。それは私の物心つく前に生
まれた、弟か妹の話かと思つていた」

フェリスはその黒い瞳をこちらに向けた。
自分と違う漆黒の輝きであるのに、自分に見
られているような不思議な感覚が身体に染
みる。

自然と手は耳飾りに触れていた。血の繋が
りもない自分のために、どうして生きるに嚴
しい森に住んでまで自分の世話をしてくれ
ていたのか不思議でならなかつた。白髪の交
じつた髪で痩せた身体でも、この頬を包んで
くれた彼女の手は温かかった。それが支えで
ここまで成長できたのだ。思い返せば納得は
できる。あの温もりは、産みの母親の温もり
だつたのだ。

「双子だつたのだな……」

「ばあさん……じゃない。母さんは、……死
んだ」

白い自分と、黒い彼。森で育つた自分とヒ

今度はトゥラスが視線を落とした。申し訳